卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	「鎌倉幕府地頭体制の研究―奥州支配を中心に―」
氏名	有沼優汰
メジャー	歴史学
マイナー	国際協力

（要旨）

本研究は、鎌倉幕府の成立史について奥州を中心に考え、新たな鎌倉幕府像に迫ることを目的としている。特に、鎌倉幕府が奥州の支配をどのように進めていったのか。そして、奥州の統治を展開していく中でどのような課題が生じ、頼朝はどのように解決しようとしたのか検証をした。

歴史史料としては『吾妻鏡』を中心に論を展開しており、鎌倉幕府論における研究史も踏まえて、自分なりの解釈を打ち出した。従来までは、頼朝と泰衡の戦いである奥州合戦に注目が集められ、様々な研究がなされてきた。今回、私は奥州の地頭体制を中心に研究を進めた。奥州支配の中心になったのは、奥州総奉行の葛西清重と伊沢家景であった。彼らが奥州でどのような役割を果たしたのか。そして、頼朝はどのような意図で奥州総奉行という役職を設置したのか考察している。

鎌倉幕府による奥州支配の過程で、現地では様々な反発が起きていたことが明らかとなった。そこで、陸奥国や出羽国の在地武士の視点から、鎌倉幕府の支配をどのように捉えていたのか再考している。従来、鎌倉幕府の成立史を論じる際には、幕府や朝廷などの権門を中心に議論が行われてきた。本稿で大河兼任や由利維平など在地武士の視点から鎌倉幕府を捉えられたことは、鎌倉幕府の成立史において新たな一石を投じることができたのではないかと考えている。

結果として、奥州合戦は戦時体制から平時体制への移行期に値すると改めて知ることができた。しかし、奥州合戦によって鎌倉幕府の支配が確立したと言えないことも確かであった。幕府は奥州合戦の戦後処理に多大な時間と労力を割いていたことが今回の研究で明らかとなった。歴史の教科書には一部分でしか取り上げられない奥州合戦は、鎌倉幕府の成立史において重要な意味を持ち、もっと歴史的に評価されるべき戦いであったと筆者は考えている。今後の課題としては、奥州総奉行がその後どうなっていったのか研究を進めていく必要がある。また、今回の研究で明らかになった頼朝の奥州観を踏まえて、右近衛大将や征夷大将軍への任命がどういった意味を成すのか再度考えていく必要がある。

（指導教員の推薦のコメント）

有沼優汰さんの卒業論文「鎌倉幕府地頭体制の研究―奥州支配を中心に―」は、重厚な研究蓄積のある鎌倉幕府の成立史に対して、自身の郷土「東北」の視点から捉え直し、かつ『吾妻鏡』という難解な史料の読解に挑んで、先行研究と自分なりの解釈とを対比しながら考察している点が高く評価できる。加えて、陸奥国や出羽国の在地武士に着目しながら奥州合戦の戦後処理の実態を検討することにより、幕府の成立過程について豊かな認識を提供してくれている。本研究と「幕府の支配体制の確立」「地頭体制の全国拡大」との関わりについては、今後さらなる追究によって、日本中世史研究に一石を投じることが期待できる。卒業論文としての十分なレベルに達しており、ここに優秀卒業論文として推薦したい。